

〈第 86 回例会、北海道大学クラーク会館講堂、2018.8.10〉
マルタン・グレゴリウス 北大オルガンを奏でる
～ポーランド オルガン音楽の 500 年～

ニコラウス・クラコヴィエンシス(クラクフのミコワイ、16世紀はじめ)		ポーランド聖歌「聖なる神」による即興曲 作品 38	[10分]
前奏曲へ調	[1分]	フレデリック・ショパン(1810～49)／フランツ・リスト(1811～86)	
ポズナンのエール(古いポーランド舞曲)	[1分]	前奏曲第4番ホ短調 作品 28-4	[2分]
サルヴェ・レジナ(元后あわれみの母)	[1分]	フレデリック・ショパン(1810～49)／ウィリアム・トーマス・ベスト(1826～97)	
ハイドウツキ(古いポーランド舞曲)	[1分]	前奏曲第20番ハ短調 作品 28-20	[2分]
作曲者不詳:グダニスクのオルガンタブラチュア譜より(1591) 幻想曲風	[2分]	ミハウ・クレオファス・オギンスキ(1765～1833)／アンジェイ・クピェツ	
作曲者不詳:オリヴァ大聖堂のオルガンタブラチュア譜より(1619) 舞曲風組曲	[4分]	ポロネーズ「祖国への別れ」	[3分]
ヴォングロヴィエツのアダム(? ～1629)		カロル・シマノフスキ(1882～1937)／アリストエア・ワイトマン(*1947)	
リチェルカータ第3施法	[2分]	練習曲第3番変ロ短調 作品 4-3	[4.5分]
ヴワディスワフ・ジェレンスキ(1837～1921)		マリアン・サヴァ(1937～2005)	
オルガンのための前奏曲作品 38-23「御手にゆだね」	[5分]	踊る絵	[5.5分]
ミェチスワフ・スジンスキ(1866～1924)		マルタン・グレゴリウス(*1991) 即興演奏	[9分]
奇想曲嬰へ短調 作品 36	[7分]		

プログラムノート

ニコラウス・クラコヴィエンシスは、ルネサンス時代のポーランドでは最も著名な作曲家の一人でした。古都クラクフの出身で、この街で活動していたとみられます。彼の作曲した鍵盤および声楽の曲の作風は、ジョスカン・デ・プレ(1450/1455?～1521、盛期ルネサンス時代のフランスの作曲家、声楽家)の作風に通じます。今夜は、この作曲家の作品から4曲——さまざまな舞曲3曲と、伝統的にカトリック教会で歌われてきた聖母マリアを称える古い聖歌「サルヴェ・レジナ」(元后あわれみの母)をもとにしたポリフォニー様式の曲——をお届けします。

グダニスクのオルガンタブラチュア譜には、16世紀のオルガンや合唱のための楽曲が含まれています。この一群の楽曲は、多くは名前の知られていない、さまざまな作曲家の作品から成り、この貴重な歴史的宝物にはきっとオルランド・ディ・ラッソ(1532～94、後期ルネサンスのフランドル楽派の作曲家)の作品もいくつか含まれています。「幻想曲風」はヴィルトゥオーソ的なパッセージや装飾音から成る変化に富んだ曲です。

オリヴァは、現在はグダニスクの一部で、今はグダニスク大聖堂になっている中世の修道院で知られます。この地区では音楽の伝統がかなり遠い昔から発展していました。オリヴァ大聖堂のオルガン

タブラチュア譜は17世紀初頭に遡り、主にポーランド、ドイツ、イタリアの音楽文化に連なる作曲家たちのさまざまな作品を含んでいます。今夜のプログラムは「ホレア」(ギリシャ語で「舞踏」と呼ばれるさまざまな特徴の5つのきわめて短い舞曲から成ります。

ヴォングロヴィエツのアダムの生涯は、今日までその事績がほとんど残っておらず、生年月日すら不明です。この作品の主要部分は最近(1993年)リトアニア北西部のサモギティアのタブラチュア譜の中で発見されたもので、1617年に遡ります。この作品集からとった「リチェルカータ第3施法」は、ポリフォニー様式のパッセージと半音階のテーマからなるフガート的一种です。

ヴワディスワフ・ジェレンスキはオルガンのための25の前奏曲の作曲者で、それらは古典的な新ロマン派のオルガン曲の模範です。この一連の前奏曲に含まれる作品の一部は、ポーランドの宗教的作品的音楽テーマに基づいています。「御手にゆだね」もそのような曲の一つで、16世紀の同名の賛歌のテーマを用いています。この楽曲の詩文の作者は有名なルネサンス時代のポーランド詩人ヤン・コハノフスキで、「庇護の詩篇」として知られる詩篇91篇「隠れ場に住む人」の詩的な読み換えです。

ミェチスワフ・スジンスキは、ポーランドロマン派

の最もよく知られたオルガン曲作家の一人とされます。彼の「**奇想曲**」は、軽快で陽気な特徴の曲で、新ロマン派のオルガン音楽の中の印象派的傾向を代表するものです。「**ポーランド聖歌『聖なる神』による即興曲**」は、「トリサギオン」(聖三祝文)と呼ばれるギリシャ正教起源の古い賛歌をもとにした一群のヴァリエーションです。スジンスキの作品は、音楽のテーマがさまざまな形で表現される、多様な構造のヴァリエーションを含む、才気あふれる曲です。

フレデリック・ショパンの非常に有名な「**前奏曲**」の2つの編曲は、オルガンの特性に比較的好く適合しています。双方の楽器を用いるときに到達するかも知れない表現法の差異が、これらの楽曲の異なった解釈法を呼び出しています。2つの「**前奏曲**」はともにたいへんノスタルジックでメランコリックな作品で、長年にわたる在外生活の後、愛する故郷へ帰りたいという、ショパンの望郷の思いを表しています。

ミハウ・クレオファス・オギンスキの「**ポロネーズ『祖国への別れ』**」は、とてもセンチメンタルな楽曲です。題名は、オギンスキが生きている間、ポーランドは国として存在せず、他の国々によって分割されていたという事実を指しています。オギンスキは作曲家であり同時に外交官でした。たくさん旅をし、さまざまな国で生活しました。「**ポロネーズ**」をとおして、彼は愛する、そして苦しむポーランドに別れを告げようとしたのです。

カロル・シマノフスキの「**練習曲変口短調**」は、彼の最も有名なピアノ曲の一つです。この作品は、彼がショパンの音楽作品に大きな影響を受けた、作曲家の人生の初期に作曲されたものです。その特徴は、非常に感傷的で、ドラマチックで、哀悼的で

すらあります。18歳の若き作曲家のこの作品には、ある種の勇壮なハーモニーが含まれ、彼の音楽人生の後期においてシマノフスキの音楽作品を主導した新印象派的傾向をすでに予告しています。

現代ポーランドの作曲家**マリアン・サヴァ**作曲の「**踊る絵**」は、民俗舞踊に影響を受けた、6つの小品の連作です。ここにバルトックの民俗舞踊曲や小曲の一定の影響を聞きとる方もいるでしょう。またさまざまな伝統的な舞踊のリズムを発見する方もいるでしょう。小品の軽快で光輝くような特徴は、とても明晰で透明なテクスチャーによって達成されています。これらの特色は、多様な音階に基づく、いくつかの現代的ハーモニーと結びつき、オルガンの響きや仕様によく適応した、ユニークな曲を創り出しています。

今夜の私の「**即興演奏**」には、私の故郷を思い起こさせる、ポーランドの伝統的メロディやリズムを織り込みます。私がお客さまに、そしてこのコンサート全体に、この音楽をお届けするには、さまざまな理由があります。日本のみなさまには、私の故郷の音楽をご紹介します、共有したいと思っています。ポーランドのみなさまには、よく知られているメロディをとおして、私たちの国を思い出していただきたいと思います。この演奏会が特別なひとときとなることを願っています。

[後記]演奏会・交流会の歓迎に満ちた温かい雰囲気にとっても感謝しています。北大のみなさま、札幌市民のみなさまにポーランド音楽をお届けできてたいへんうれしく思います。また、北大の歌をプログラムに入れることができたことも大きな喜びです。

(マルタン・グレゴリウス、*Kitara* 専属オルガニスト)



ポーランドのオルガン音楽のみの演奏会など、日本広しと言えども、そうあるものではない。そのような貴重な機会ということもあり、当日は雨天にもかかわらず、300人以上の方々のご来場くださった。

実は、開演前にアクシデントがあった。オルガニストは事前に何時間もかけて音色の組み合わせの操作をオルガンに入力しておく。今回もその作業が前日までになされていたのだが、当日マルタンさんが会場に来てみると、データが全て消えていたのだ。真っ青になったはずだが、マルタンさんは集中して作業をやり直し、無事に本番を迎えた。

プログラムは、古い宗教曲から、ショパンのピアノ曲の編曲、また、現代曲や即興演奏など、実にバラエティーに富んだ内容である。演奏も素晴らしく、複雑なテクスチャーの細部がクリアに弾き分けられ、

曲により異なる色彩が生み出されていた。

そして、演奏会の最後にはちょっとしたサプライズもあった。当日マルタンさんがたまたま耳にした、北大の寮歌「都ぞ弥生」の旋律で即興演奏を披露してくださったのである。マルタンさんの深い音楽性と心遣いに、会場が温かな雰囲気包まれた。

(高橋 健一郎)



(左) 終わりの挨拶 (右) 交流会

